

日本学術会議の在り方に関する政策討議（第7回）
（総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会）

議事概要

- 日 時 令和3年12月9日（木）9：59～11：52
- 場 所 中央合同庁舎第8号館6階623会議室
- 出席者 上山議員、梶田議員、梶原議員（Web）、小谷議員（Web）、
佐藤議員（Web）、篠原議員（Web）、橋本議員（Web）、
藤井議員（Web）
（事務局）
大塚内閣府審議官、米田統括官、合田審議官、松尾事務局長、井上事務局長、
阿蘇審議官、高原審議官、橋爪参事官
（日本学術会議）
望月副会長、高村副会長、菱田副会長、小林幹事、三上事務局長
（内閣府大臣官房総合政策推進室）
笹川室長、黒瀬副室長、児玉参事官
- 議題 日本学術会議の在り方に関する政策討議（第7回）
・日本学術会議第183回総会について
・「日本学術会議のより良い役割発揮にむけて」についての意見交換等
【非公開】

○ 議事概要

午前9時59分 開会

○上山議員 それでは、定刻になりましたので、ただいまより第7回の日本学術会議の在り方に関する政策討議として、総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会を始めます。

本日は、内閣府から大臣官房総合政策室、日本学術会議事務局に参加いただいております。小林大臣は公務の都合により御欠席と聞いております。

それでは、議事に入ります。

なお、会議の記録及び会議の公開、非公開については第1回の政策討議で決めたとおりとい

たします。

それから、前回の政策討議の議事概要は有識者議員の皆様到现在御確認を頂いており、発言の皆様の確認が終わり次第公表といたします。

本日の議事は、日本学術会議第83回総会について、並びに、「日本学術会議のより良い役割発揮にむけて」についての意見交換等でございます。

先日、12月2日、3日に開催された日本学術会議総会において、提言見直し、会員選考見直しが図られるなどしたと承知をしております。その概要について、資料1に基づき、日本学術会議から説明をお願いいたします。

では、早速でございますけれども、梶田会長、どうぞよろしくをお願いいたします。

○梶田会長 ありがとうございます。

それでは、資料1に基づきまして、12月2日、3日の学術会議の総会の報告をさせていただきます。

では、1ページおめくりください。今回の総会にオンラインと学術会議講堂参加者合わせて約160名の会員の方が参加いたしました。そして、初日の冒頭には小林大臣にお越しいただき御挨拶を頂きました。このときの主な議題ですが、(1)科学的助言機能の見直し、会則改正、(2)会員選考プロセスの見直し、(3)総合的・中長期的課題に関する討議、(4)会員任命問題であり、これらの(1)から(4)につきまして報告させていただきます。

まず(1)科学的助言機能の見直し、会則改正ですが、これについて既に何度か御説明してきたとおりですが、現在分野横断的な観点から、中長期的視点・俯瞰的視野に立ち、説得力のある科学的助言を行うということできいろいろと改革をしております。

主な見直しの内容ですが、まず科学的助言等対応委員会を設置し、課題設定から査読・公表まで、科学的助言活動の全体を把握し、分科会等の連携促進を行うとしております。これについては資料最後のページにありますので、適宜御覧ください。

それから、提言は今までは委員会・分科会名で発信しておりましたが、これを学術会議名で発出することとして、提言の意味合いを変えました。特に、これにより総合的・俯瞰的な見地から、政府や広く社会に向けた提言を公表するということとしております。それから、関連しまして、ここに内部審査手続を厳格化とあるのですけれども、査読体制について変更しまして、内部とあるのですが、外部の目も入れるということを入れました。

それから、もう一つは、委員会・分科会による意思の表出として、見解というものを新設し、専門的見地から提案を発表するもの、社会的な議論を喚起するための多様な意見を提示するも

のとして定義しております。そして、これらの提言や見解の満たすべき事項を明確化し、これらを満たした上で出してくださいということを明確化しております。

そしてさらに、課題設定とか科学的助言の作成における学術会議の外部との意見交換を実施するというを明確化し、そして既に言いましたけれども、査読体制等を整備いたしました。

そして、これに関連して、意思の表出に係る会則改正として、見解の追加と提言の発出主体の変更を承認していただきました。そして、これが承認されたということを受けまして、12月下旬の幹事会において会則改正に伴う関連規定を整備する予定にしております。

次のページを御覧ください。(2) 会員選考プロセスの見直しですが、目的は既に述べているとおり、会員選考に関する説明責任を強化していくということです。既にかなり述べていることではありますが、新たに選考方針を定め、この方針には求められる会員像、第26期に重点的に取り組む事項等を明示する予定にしております。この選考方針は外部の有識者をはじめとする第三者の意見も聴取するなど、広い視野に基づく検討を行った上で策定し、公表することとしております。

それから、今まで学協会のみから会員候補者に関する情報提供を受けていたのですが、その枠を拡大します。大学関係団体とか産業界とか政策関係機関等へ拡大していくことを決めました。そして、部を超えた選考枠を拡大し、そして最後には選考理由等を公表するということとしております。

具体的なタイムラインとしては、次回の総会に選考方針案をまずお諮りして、来期に向けた選考プロセスがスタートすることとなります。

続いて、(3) 総合的・中長期的課題に関する検討ですが、これはこの①から③、カーボンニュートラル、パンデミックと社会、研究力強化について、検討の現状を報告し、意見交換を行うということを行いました。これについては詳しいことは私の方からは省略させていただきます。

続きまして、(3)の続きなのですが、国際戦略(案)というものを議論いたしました。これも既にこの会議でこういうことを議論しているということを報告したとおりですが、ポイントとしては、国際的なことを考えるときに、期ごとに全く変わっていたのでは駄目なので、少なくとも期をまたぎ、五、六年の戦略とすることを意図しております。今回はこの案を総会に提示して御意見を踏まえて更に検討していくという段階です。

重点目標は既により良い役割発揮の中で述べてきておりますので飛ばさせていただきます、具体的な協力分野についていうと、多国間の交流・協力、これは例えばGサイエンス学術会議など

での協力があります。特にこれについていうと、下の※にあるのですが、2023年は日本がG7の議長国で、学術会議はG7各国のアカデミーによるGサイエンス学術会議の議長として会議を開催し、そして共同声明の作成を主導するということが想定されております。そして、これは我々自身へのリマインドという意味もありますが、2022年度の早い時期から各国アカデミーや政府関係機関との意見交換を進めるなどしなければいけないということを確認したところではあります。

これに加えて、アジア地域を中心とした交流・協力ですとか、二国間の交流・協力の重要性などを議論し、また国際という意味での若手科学者の育成についても議論しています。特に2022年はGlobal Young Academyの総会の日本開催があるということで、学術会議としてもこれをサポートしていくこととしています。

最後、会員任命問題ですが、これは新聞等でも出ておりますので御存じかと思いますが、岸田総理との早期の面談を実施し、会員任命問題を含む様々な課題について率直な意見交換の機会とすることを総会の総意として強く要望するという要望書を決定させていただきました。

私の方からは以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

時間の関係から、質疑は次の議題で一括して行うことにいたします。

続きまして、前回に引き続き、「日本学術会議のより良い役割発揮にむけて」について、議論をしたいと考えております。本日も前回と同様に、日本学術会議から梶田会長に加え、報告を取りまとめられた菱田副会長、望月副会長、高村副会長及び小林第一部幹事に特別に参加いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、ここからは率直な意見交換の確保のため、非公開とさせていただき、菱田副会長、望月副会長、高村副会長及び小林第一部幹事並びに事務局を除き、CSTI有識者議員以外の同席者、随行者も御退席をお願いします。プレスの皆さんもここで御退席をお願いいたします。CSTI有識者議員同士のディスカッション部分の議事概要の扱いに倣い、後日発言者名を伏せたものを公表させていただきたいと存じます。

【プレス・同席者・随行者 退室】

○ それでは、意見交換に資するため、これまでの政策討議の意見交換をまとめた資料2、「日本学術会議の在り方に関する政策討議」における主な意見及び資料3「当面の論点」も併

せて配布させていただいております。まず資料3、「当面の論点」について、その概要を事務局から説明させていただきます。その後意見交換を行いたいと思います。それでは、まず事務局から、「当面の論点」についての説明をよろしくお願いします。

○ 「当面の論点」、資料3でございます。

前回も同じような資料をお配りしましたが、その後の議論を踏まえてある意味リバイスしたものです。前回かなり細かい問いに答えていただきまして、特にその後それで済みというようなものは落としているつもりです。簡単に概要を御説明します。

まず、冒頭、役割・機能のところですが、C S T Iでは求められる役割・機能は何か、どう改善していく必要があるか、リソースや組織形態が支障になっていないかというような観点から議論してきた。これは当然なので入れていませんでしたけれども、一応確認までに入れさせていただきます。

それから、1ページ目の後半の部分、黒い網掛けは、前回の政策討議の中で議論が出た部分でございます。一定期間を区切って骨太の課題について提言を出していただきフィードバックしていったら、そこでどういう問題があるのか見ていくべきじゃないかというような御意見がありました。結果ベースで見ていくことが必要じゃないか、今やっていることを突破口にして考えていくべきじゃないか、そんな御指摘いただきましたので、そういう趣旨のことを加えております。

それから、1ページ目の一番最後のところ、ここは前回提案として出ていたことを取りあえずまとめてみたものです。例えばカーボンニュートラルというのを例に取って、ここ数か月とか3か月とかいう言葉出ていましたけれども、そのぐらいで提言などを出していただいて、政策討議においてその発出の過程、作るまでの間で行政、経済界なんかとすり合わせ、どんな感じでやっていたのか、その後も、出しっ放しじゃなくていろいろフォローされているのか、そんな様子を見させていただいて、正に先ほど御説明いただいたような、新しく作った仕組みに基づいて更に助言機能を発揮していただいている様子を見ていくべきじゃないかと、そんなことを入れさせていただきます。

かなり抽象的になっていますので、ここはまた今日御議論深めていただければと思っているものでございます。

それから、2枚目、上の方、国際活動の部分、ここは国際活動が入っていないとという鋭い指摘前回頂きましたので、それを踏まえて入れさせていただきます。

それから、2ページ目の下の方、波線部分は、この後学術会議から最初に御説明いただければ

ばと思っておりますけれども、まず、学術会議は日本の生態系の中であって、航行中の船であってというようなお話を頂いています。そうはいつでも、もし人的なリソース等の制約がきついのであれば、例えば会員・連携会員だけじゃなくて、外部のいろんな専門家を連れていく手もあるんじゃないか。実際、先ほども第三者の目を入れるというようなお話もございましたが、その辺りどう考えてらっしゃるのか。それから、時々指摘されますけれども、外国人の会員がないことをどう考えるか。この辺りお願いしたいと思います。

それから、3ページ目、やはり波線のところですが、会員に業務命令が効かないフラットな組織であって、平等な立場で運営されているので時間が掛かるのだ、恐らくそういうことなんだろうと思っておりますけれども、そのメリット・デメリットを改めて学術会議としてどういうふうに整理をされているのか、お願いしたいと思います。

それから、ちょっと細かくなりますけれども、通常役所なんかでも細かいことってどうしても例えば大臣じゃなくて事務方に下していくというようなことをやりますので、例えば幹事会などにどういった権限を移されているのか、そんなところも、すみません、御説明いただければと思います。

それから、下の方ですが、専門人材配置、ここもリソースが制約あるんですという御説明でしたが、例えば現に来年度要求で定員要求あるいは人件費の要求されていますので、今までどうだったのかということと、今後もそういった努力されていくのかなという辺りをお願いできればと思います。

それから、最後、一番下の波線ですが、ここ実は前回も書いていて、時間の関係でよくお話しただけなかつたので、もし何か追加して教えていただけることがあればお願いしたいと思います。

以上でございます。

○ ありがとうございます。

それでは、これから意見交換とさせていただきます。まず、今日の論点に基づきまして幾つか新しいところも入っておりますので、日本学術会議の方から議論を始めていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○ ありがとうございます。

前回に引き続きまして意見交換の機会を設けていただきまして、ありがとうございます。

では、学術会議側の考え方、立場、資料3に示されている論点に従って順次説明をさせていただきます。

基本的に波線の部分について私の方で説明いたしますが、その前に一言申し上げさせていただきます。昨日、本日の資料を受け取りまして、大変驚いた点がありますので、そのことをまず申し上げさせていただきたいと思います。

それは、資料3の当面の論点、この最初のページです。当面の論点について、事前に私が事務方の方から説明を受けたときには、例えば3か月程度で提言等を出していただくという表現はなく、今後3か月おきくらいにカーボンニュートラルに関する活動の状況を報告することが想定されているのかと理解いたしました。一方、既に報告しているとおり、この間我々はより良い提言発出に向けて審議を重ね、この12月の総会で、時間は掛かってもしっかりした中長期的・俯瞰的視野に立った審議を行い、さらには2段階の査読を含むなどの提言の質の保証ができるシステムとすることで合意いたしました。これらを踏まえて考えますと、我々自身が納得できるような、そして社会が納得するような提言を3か月で出せるとは正直思えないです。もちろん時間が掛かり過ぎるといふ御批判があることは承知しておりますけれども、基本的に私たちは学者です。論文を書く際に論点もまとまらぬまま論文としてまとめることはできないとの学術的信念を貫いてきた人たちの集団です。もちろん不要に時間を掛け過ぎないように努力をいたしますが、それでも納得のいく審議の結果、提言を出すべきとの基本姿勢を御理解いただければと思います。したがって、例えば3か月程度で提言等を出していただくという部分につきましては、よく議論をさせていただきますよう要望いたします。

そして、そもそも平成15年の総合科学技術会議の専門調査委員会の報告では、総合科学技術会議と学術会議について、「車の両輪」として我が国の科学技術の推進に寄与するものと位置付ける旨が記載されております。また、この政策討議の第1回の会合で井上前大臣は、科学技術・イノベーション基本計画において、CSTIは学術会議に求められる役割に応じた連携関係を構築することとされていること、それから、学術会議の在り方を考えるということは科学技術・イノベーション政策とアカデミアの在り方を考えることと述べられております。これらを踏まえれば、本来学術会議を対象とするのみならず、政府の審議会、それからCSTIとの関係なども含めて総体として議論をする必要があるのではないのでしょうか。もちろんいたずらに議論を引き延ばす意図は全くありませんけれども、この問題を科学技術行政全体の中でどうデザインするかという視点を大切に議論していくべきかと思っております。

それで最後、これまでの会合では学術会議側が御質問に回答する形で議論が進められましたが、本日はそれらに対するCSTI側の分析、評価等もお伺いしながら議論が深まるということをご期待したいと思います。

続きまして、これから波線の部分に関する学術会議の考え方を述べさせていただきます。

科学的助言に関する総会での議論については既に報告しましたので、ここは飛ばさせていただきます。

それから、選考プロセスで、非常勤・ボランティアの会員・連携会員による活動に限界があるのなら、全てを会員でカバーするのではなく、日本学術会議の科学者間ネットワークを生かし、例えば学術会議内外の専門家がテーマに応じて参画するような柔軟・流動的な仕組みは考えられないかということですが、これにつきましては、現在でも学術会議の全ての活動を会員・連携会員だけでカバーしているわけではなく、科学者間のネットワークを生かして様々な形で外部の専門家の参画を得ながら学術会議の活動を展開しております。

具体的には、委員会や分科会等審議に際して外部の専門家を参考人として招いて、ヒアリングや意見交換を行ったり、学術フォーラム等の報告者やパネリストを依頼したりしているほか、分科会の下の小委員会のレベルでは、会員・連携会員でない者も構成員として審議に参画しています。

続きまして、次の波線、各国アカデミーでは外国人会員の存在もみられるが、グローバルな課題に対応するためには、外国人材が審議に参画する仕組みが必要と考えられないかですが、分科会で参考人に招いて意見を聴取したり、外国人アドバイザーに委嘱したりするなどの形でその知見を取り込むということは現在でも可能です。また、12月の総会で決めた提言等の在り方の見直しでは、グローバルな議論の状況に十分な目配りがなされているかという項目を確認事項として含めており、外国人材の活用が必要な場面が今後増えてくると考えており、外国人アドバイザーの積極的な委嘱などで対応していきたいと考えています。

続きまして、財政基盤、情報発信機能・事務局機能です。会員に業務命令が効かないフラットな組織であり、全会員が平等な立場での運営によるため意思決定に時間がかかるという特性については、日本学術会議としては、改革の推進や国際活動、科学的助言の発出に当たり、メリット・デメリットをどのように自己分析・評価しているか。また、迅速な意思決定・実行の阻害要因が「フラットな組織」ということなら、幹事会に権限を委譲する等の改善策をなぜ講じないのかということですが、これにつきましては、学術会議の意思決定について、時間を要するというを一律に正当化する意思は全くないのですが、他方で政策決定や企業経営における意思決定と同様の時間軸での対応を一律に求められるということも現実的ではないと思います。意思決定に時間を掛けるべき部分と、スピード感をもって対応すべき部分とをどう見極めるかの問題と考えます。また、現在学術会議では中長期的・俯瞰的な課題への対応を中

心に活動することとしております。学術的な知見に基づく検討に要する時間と、政策決定に求められる時間軸とが合致しないことはしばしば起こるということは御理解いただけるかと思えます。

このような点を念頭に置いた上で、東日本大震災や新型コロナウイルスへの対応など、緊急性の高い社会課題への対応や組織運営上の課題への取組にあつては、スピード感をもった対応が必要なことは当然です。平等な会員で構成された総会を最高評決機関とする組織に機動性を持たせるため、意思の表出、国際活動、選考手続等の総会の権限の多くを幹事会に委任して、迅速な運営を行っています。そうした努力は今後も続けていく予定にしております。

続きまして、次の波線で、例えば専門人材の配置は、現行の定員要求や予算要求の部分と、日本学術会議としては、本来必要な活動のうち、他に具体的に何がどのような理由により実施できないと分析しているかということにつきまして、基本的には学術会議をより活発化するために必要な資源は、事務局機能の強化と国際対応などのための経費面と考えておりますが、詳しくは事務局より回答いたします。では、お願いいたします。

○ 事務局から補足させていただきます。

最後の点に関連いたしまして、令和4年度要求では、以前にも御説明したかと思えますけれども、補佐級二人の定員、それから非常駐の学術調査員の経費を要求中であります。4月の報告に掲げた取組を本格的に展開する上では、この要求、現在査定の大詰めだと思えますけれども、仮に全て認められたとしても、リソース制約の抜本的な解消にはなかなか難しいのではないかと考えております。

本日の参考資料2の26ページ、27ページに平成13年度以降の予算、それから定員の推移が資料としてございます。平成15年、27年報告でも事務局機能の強化というのほうたわられていたわけでございますけれども、この間事務局機能の強化が常に模索されながらも予算、定員、こういった形で縮減してきているという実態がございます。

内閣府における概算要求ですとか定員要求というのは基本的に前年度をベースに部局や組織を単位として調整が行われるわけでございますけれども、内閣府がその性格上、時々の内閣の重要政策への対応を抱え込むということが多いといった事情もございまして、こういった枠組みの中で、例えば科学技術政策や宇宙戦略、地方創生といったような他の部局の有力な政策課題を上回る優先度を学術会議事務局機能の強化といったものが同等ないし優越するような立場に立たなかったということで、内閣府から財務省等の査定部局にその要求が出ていかなかったといったところもこの根本にはあるのではないかと考えております。

こうした状況を突破して、学術会議の事務局機能の抜本的な強化を図り、それに必要な予算、定員を確保するということを考えますと、学術会議あるいはその事務局が自らその必要性を主張するというだけでは必ずしも十分ではないと考えておりました。全政府的な観点で見て政策的なプライオリティの中にこの課題が位置付けられるということがあれば、そういったことも可能になると考えております。一般論でございますけれども、例えば毎年6月頃に閣議決定される骨太方針などに明記されますと、これは非常に政権としての優先課題という位置付けが明確になりますので、内閣府内のいろいろな調整の中で優先的な課題として対応が図られて、査定当局にその要求が出ていってといったようなことはあるのではないかと考える次第です。

以上です。

○ どうもありがとうございました。

それでは、これから我々議員も含めた意見交換とさせていただきますが、いかがでしょうか、先生方の中でお手を挙げていただいていると思います。では最初に、どうぞ。

○ 御説明ありがとうございました。

最初の総会の方の御検討に関連して少し御質問させていただきたいと思います。一つは、科学的助言機能の見直しにおいて、査読のプロセスなどを決められたということで、参考資料にも査読体制の組織の案などをお付けいただいております。助言機能全体で見たときには、ここで出来上がってきた提言をどのように外に伝えていくかといった観点は大事だと思うのですが、その辺りは今回は御検討あるいは議論はされましたでしょうか。

それから、3点目のところで、助言機能とも関係すると思いますが、カーボンニュートラルなど、中長期的、総合的課題を中心に活動をしていくことになったという御説明でした。中長期的課題で今議論していることは、かなりグローバルに重要になってくる、グローバルな関係が重要な課題だと思います。例えばここにも書いているG20や、G7は23年に日本も議長国になることもありますが、そういったものを見据えて、この中長期的な課題についても、どういうアクションを取っていくかのプランニングが必要になるように思います。その辺りは御議論がなされたかどうかを教えてくださいたいと思います。よろしく願いいたします。

○ ありがとうございました。

これはどなたから。

○ 科学的助言について報告させていただきます。

アウトリーチと広報に関しては、総会の中でも意見も出まして、しっかりやらなくてはいけないという意見もありました。それに対しては、今、査読等を行う委員会として、科学的助言

等対応委員会を設置し、査読だけを行うのではなく、そのフォローアップや広報も含めて、これから期を超えてやっていくという考えを会員の皆さんに申し上げました。

つまり、色々なステークホルダーからの御意見を聞きながら、今後の提言の提出に当たっては、いきなり完成品が出てくるのではなく、その前の段階から御相談をする段階を設ける、例えば産業界からの意見を、こういう意見があるのだということを委員会でフィードバックを掛けると。その上で、出てきたものは、当然、前段階で御意見を頂いたところに持っていくというふうな、密な関係をしっかり作ると。それらを期を超えて、事務局がフォローをしながら、この委員会がガバナンスをしっかりとコントロールしていくという形にしていこうと考えています。

広報に関しても、事前の形で、例えば提言を出してフォーラムをやるにしてもシンポジウムをやるにしても、どういうふうなアピールの仕方で、どの世代に訴求していくかということも、今、広報の専門家から意見を聞いており、単に動画配信ではなくて、有効な手段は何かということも是非御検討くださいということも申し上げました。

その具体的な体制については、今月の幹事会で議論をして、進めていくつもりでおります。私からは以上です。

国際の方は他の方から説明いただきたいと思います。

○ ありがとうございます。第2点目の御質問についてお答えをしたいと思います。

御指摘は、中長期的な、あるいは俯瞰的な課題の設定について、国際的な動向、グローバルな連携を念頭に置いた課題設定、取組が必要ではないかという御質問であったかと思えます。先生の御指摘のとおりでして、現在、G7の各国アカデミー、そしてG20の各国アカデミーとの議論、国際学術会議やIAPなどの議論を踏まえて、課題設定をしようとしております。

特にG7に関しては、梶田会長からも御指摘がありましたように、日本が議長国を務める2023年は、学術会議としても非常に重要な役割を果たすタイミングでして、2021年、今年、Gサイエンス学術会議を主催しました英国の王立協会、そして2022年、来年主催をいたしますドイツのレオポルディーナとも個別に意見交換をしております。2022年に取り上げるテーマについて、ドイツのレオポルディーナからの御提案は、気候変動、カーボンニュートラル、パンデミックに焦点を置いた議論をしたいということでございます。

こうした議論を踏まえて、日本学術会議の中長期的な課題についても設定をして、取組を進めております。今後においても、とりわけ、こうした国際的な連携の中で連携を進める課題を特定しながら取組を進めていくことが重要だと考えております。

以上です。

○ ありがとうございました。

それでは、続きましてお手が挙がった方、どうぞ。

○ どうもありがとうございます。

学術会議で御議論いただいた科学的助言等について、随分具体的に考えてくださっているように思ひまして、大変有り難く存じます。

国際的な学術団体がどのような活動をしているかをいろいろ調べていく中で、日本の学術会議や日本の科学コミュニティが、国際的な学術団体で重要な役割を果たしていることを多々発見いたしました。私自身のこれまでの勉強不足ということもありまして、これほど重要な貢献をされてきたことを存じ上げなかったこと、大変反省するとともに、一方で、もっと情報発信をしっかりといただければ、学術会議の存在意義ということ国民や社会にも理解していただくことができたのではないかと感じています。

例えば、過去10年間、ワールドデータシステムという、学術におけるデータの取扱いに関する取りまとめを日本が行ってきたということですが、そういうようなことも十分に私自身は理解しておりませんでした。国内の科学技術データプラットフォームを議論する中で、世界的な情勢をインプットしていただき共有できれば、より有効な議論ができたのではないかと考えています。これは本当に私自身の勉強不足でございまして、学術会議では十分、情報発信されたというふうに思いますが、よりいい関係を築いていければと感じた次第です。

それから、学術会議の大変重要な役割として科学的助言ということ、特に社会に非常に大きな影響がある科学に関する助言をするということがあり、そのようなことに向けて積極的に考えていただくということは、これからの学術会議の在り方としても大切です。学術会議ならではの専門性を持った、それぞれの専門的な知識に基づきながらも、その専門性を越えて提言をしていただくということが、学術会議でなくてはできない機能でございまして、必ず3か月ごとに提言を出すということは必ずしも求めなくてもよいのではないかと存じます。もちろん、発出のタイミングや重要性、緊急性ということもございまして、その課題ごとに要請されるタイムスケールはありますけれども、やはり学術会議ならではの科学的助言ができるような仕組みを考えていただくのがいいというふうに考えてございます。

以上です。

○ ありがとうございました。

続きまして、よろしく申し上げます。

○ ありがとうございます。

いろいろな観点で見直しを頂いて、説得力ある科学的助言を行うということですが、発出側での位置付けをより重要な形に変えるということになりますと、受け取る側もそのような意識をしっかりと持つ必要があるということに改めて感じました。

その上で、質問の中で御説明いただいたように、広報の在り方、社会に対してのダイアログの重ね方というところについては、今後の発展に向けて期待するところです。以前からお話が出ていましたが、事務局強化の中で広報についても対応されるべきと思います。学術調査員を3名増員されるということですが、広報との連携や強化についても期待しています。

先ほど提言の期間の話がありました。提言を3か月ごとにとするのは拙速過ぎるかもしれませんが、一方では、何かを変革するためにアジャイルに物事を動かすには、3か月ごとに活動状況を見ていくことは、一つのやり方だという気はいたします。前回、課題を決め、提言を検討し、発出し、働きかけて、それがどのように寄与したかを振り返るという一連のプロセスの中で見ていくという話がありました。全体を通してのパッケージという表現も出ていましたが、テーマによってはプロセス全体を回すにはすごく時間が掛かるものもあると思います。これを1年も2年も掛けてやるのではなく、途中のスポットスポットで、進捗が順調なのか、もっと何かをしなければいけないのかを評価し、見直しをしていくことは必要だと思います。企業においても、大きな変革を行うときには、3か月単位で状況を見て、見直しをしています。

外国人が審議に参加する仕組みについて、最初にお話を伺ったときに、外国人の方が中に入らないのは制度的な問題があるからだと理解しましたが、アドバイザーや委嘱として対応できるということですので、そこも期待したいと思います。

ありがとうございました

○ ありがとうございます。

では、続きまして、よろしく願いいたします。

○ ありがとうございます。

様々な改革のアイデアを実行されておられるということについては、大いに敬意を表したいと思います。

どのようにすれば学術会議が今期待されている科学的助言機能というものを十分発揮することができるのかという1点が、私の最大の関心事項でございます。そういう意味で、お願い2点と意見を1つ申し上げたいと思います。

お願いの1つ目は、具体的なプロジェクトの中で、科学的助言機能の発揮の仕方を見ていく

という考え方については賛成ですし、科学的分析の正確さが大事であるということも十分理解出来ますが、プロセス論ではなくて、それらの課題の持っている緊急性とか時間軸というものに合わせて提言していく必要があるという点です。正確性を追求する余り、求められる解決策の時間軸がずれて、必要とされる期限までに解決策が出てこないということになっては、当然のことながら意味がないわけですから、実態的な課題の解決のスケジュールの中で、学会の助言がしっかり生きるようなタイムフレームのセットをしていただきたいというのが1点目です。

2点目は、アカデミアの世界における日本の立ち位置というものがしっかり確保されているんだらうかということです。この点は今までも随分議論してきましたけれども、何らかの形で外国人が審議に参加するというのが、我が国の教育界の国際的な視野を高めるとということにも多分つながっていくんだらうと思いますので、ここは是非とも前向きに御検討を頂きたいというのが2点目です。

以上、2点お願いですが、最後は意見です。これは先ほどの御説明の中では出てこなかった論点なんですけど、前回も私、同じことを申し上げましたのが、産業界代表ということで、アカデミアの世界からの議論ではないということを前提に、もう一度、今後の学会の在り方ということを考えていく上で、意見を申し上げたいと思います。

様々な改革の案を検討されているということは大いに評価するわけで、例えば科学的助言等対応委員会を設置したり、あるいは総合企画推進チームを立ち上げたりということで、検討すべき課題をより正確に、そしてアジャイルに取り上げていくという体制を取っていくということはやられようとしているわけなんですけれども、一方で、先ほどからの事務局機能の強化あるいは予算の確保ということが、非常に難しい状況であるというご説明があります。しかしながら、私はそれこそが科学的助言機能の強化の上では極めて重要で、必須ではないかというふうに思います。

そういう観点から、いま一度、組織形態の問題についてちゃんと考えてみるべきなのではないかと思います。どっちにしろということ言うつもりはありませんけれども、4月22日の報告書でも、個別の法律を制定して、5要件全てを満たす特殊法人を考える余地がないわけではないということやうたっているわけですので、新しい時代に合致した科学的助言機能をより一層発揮していくために、従来の組織形態以外の組織形態、これは当然のことながら、法律の変更とか新しい法律の制定ということが前提となりますけれども、それを具体的に検討してみた上で、現状の組織と比較・検討してみるプロセスを踏んでみる必要があるか

と思います。その上で、どちらの形態の方が助言機能を一層発揮するためにはベターなのかという議論のプロセスを踏むべきではないかと思っています。

その過程の中でこそ、財政面でもより幅広いサポートができるのかどうか、あるいは、必要な常勤スタッフや研究機能をふさわしい形で配置できる組織になり得るのかどうかということが、より具体的に明らかになってくるのではないかと思います。そうした考察の結果、今の組織を維持する方が良いという結論になるかもしれませんが、今申し上げたようなプロセスでの比較・検討というのが、新しい学術会議のスタートにとって重要な考察のプロセスではないかというふうに考えます。

最後は私の意見でございます。ありがとうございます。

○ 貴重な意見、どうもありがとうございました。

それでは、よろしく申し上げます。

○ 学術会議とCSTIの関係について、冒頭にお話しされました。おそらく学術会議の方々はその点について非常に気にされているのではないかと思いますので、私の見解を述べたいと思います。

まず今までの議論からも分かるように私たちCSTI議員は、このような非公開の場での議論においては個人の立場で率直な意見交換を行っております。したがって、今からお話しすることも、個人の責任においての認識を申し上げることになります。ただし、CSTIとして最終的な報告書、または総理の下で行うCSTI本会議において出す文書は、全員一致の下、あるいはそれに納得した人たちが署名した上で出されるので、それについては組織としての意見になります。ここでの非公開での議論は、個人の立場でそれぞれ意見を言い合い意見交換し、その上で意見統一を図るというプロセスになっております。今これから申し上げる学術会議とCSTIの関係についての見解というのも、そのような位置付けだと受け取っていただきたいと思います。

私自身はさきほど言われたように、学術会議とCSTIは車の両輪であって、どちらが上にあるとか下にあるとかということではなくて、科学技術・学術行政において車の両輪で、役割を分担しながら進めているということだと思います。CSTIは、政策に直接関わるような形で政策を直接提言する、あるいは政策作りに直接関わります。一方で学術会議は、申し上げるまでもありませんが、アカデミアの意見を総体してそれを政策に生かすような形で提言をするというように、簡単に言うとそれぞれそのような役割であると思っています。そのため繰り返になりますがどちらが上とか下ではなくて、車の両輪であると思っています。

では、今回なぜこのように学術会議の代表の方にCSTIの議論の場にお越しいただいているのか。あたかもCSTIが学術会議をコントロールするような指示をしているかのような印象を受けているのではないかと思います。決してそのような関係ではないのですが、なぜ、形式的にこのようになっているのかというのは、これは大臣から私たちが指示を受けて、学術会議の問題について、CSTIとして学術会議の在り方、それから役割については是非議論してほしいということがあったためです。

そのため政府と学術会議の間にCSTIが置かれたという認識でおります。それで、私たちは今、学術会議の方々との意見交換をしながら、政府と学術会議がしっかりとした意見同一ができるようになるための、少し言い方が適当ではないかもしれませんが、仲介というか、そのような立場でやらせていただいていると、少なくとも私はそのように理解しております。ですから、車の両輪という位置付けは、全くそのとおりです。今この時点における議論は、仲介者の立場で私たちは様々なことを学術会議の方々と意見交換しているという、そういうつもりで少なくとも私は参加しております。

また、非常に驚かれたという、3か月程度で提言等を出していただきたいという点について昨日見たということですが、実は私もこれについて昨日説明を受けました。ただ、受け取り方に関しては、3か月という期間については、結構頻繁にお願いすることになるのだなという印象を持ちましたが私はこれ、「提言」と読んでなくて、「提言等」と書いている「等」にすごく注意して見ていました。ですから、提言を出すには、これは前の方がおっしゃったことと同じですが、非常に時間の掛かる話だと思います。私たちは先ほど申し上げたように政策を打ち出すことを普段行っています。今回、学術会議に対して求められているように政府の政策に向けた提言を学術の立場から出していただくわけです。そういった観点で我々の思いについて意見交換させていただくことによって、学術会議が提言を策定する際の足しにさせていただきたいと思います。そのための意見交換の場がこの3か月ごとに行われるというふうに私は受け取りました。私はそのように理解しています。

それで、お話にあったのは、そういうふうに思っておられるのだなと思いましたが、私も、がちとした提言を出されるというよりは、こういう問題というのは、やはり変えていくというか、科学技術の進展、それから世の中の進展によってこのような問題は変わっていきますから、そういう意味できちっと完成した論文を書くというよりは、アジャイルという言葉でおっしゃっていましたが、学術界の方にとって受け入れられるイメージとちょっと違うかもしれませんが、大きな方向性を出していただいて、それに対して私たちが普段出してい

る政策の観点から見た際に、どのようなことを政府は求めているのかというようなことについての意見交換をする場というのが、この3か月ごとに行うというようなイメージを私は持っております。

そうなのであれば、お互いに協力しながら、我々は学術会議に協力しながら、政府と学術会議の間の意見がよりスムーズにつながるような役割を果たせるのではないかなと思っております。最初に述べましたように、これは私の個人的な見解です。しかし、多分、皆同じ意識ではないかなと思います。是非、学術会議とCSTIの関係は、今申し上げたようなイコールの形で協力関係を続けていければと思っております。

以上です。

○ ありがとうございます。

先ほどの御発言に対する御質問があるということなので、よろしくをお願いします。

○ 座長のお許しを頂きまして、先ほどこの論点の紙の3ページ目の下のところ、専門人材の配置から始まる予算などの制約のお話につきまして、補足的な御発言があったと思いますが、ちょっとそれにつきまして確認等をさせていただければと思います。

なかなか今の予算の体系の中で、非常に予算の獲得あるいは増額を試みるということが難しいというお話がございましたが、その一番最後の方で骨太の方針に言及をされて、そういう中で一定の記載がされて、位置付けがされればというお言葉がございました。ただ、これも御承知のとおりかもしれませんが、その骨太の方針というのは、これは毎年毎年、その時々的重要課題について、当然のことながら、もちろん多少スパンの長い課題も入っていますけれども、基本は1年1年単位できちんとその取組が評価をされ、厳しくチェックをされ、その上でそうした重要政策課題として盛り込まれると、そういうものだろうと思っております。

例えばこのグリーンの今回のカーボンニュートラルについても、今回の骨太の中に、四つの原動力の一つとしてグリーンの社会の実現というのは位置付けられているわけですので、逆にお聞きしたいのは、そういう中に学術会議として相当、年単位でのスピーディーな具体的な取組が求められる、そういう施策体系の中に学術会議としてきちっと入っていく覚悟はありになると、そういう理解でよろしいでしょうか。

○ 私が骨太方針というふうに申し上げたのは、一般論ということをお断りした上で、一つの可能性として言ったわけです。今、ご指摘いただいたとおりのことだと思いますけれども、何か大きな組織の在り方の見直しみたいなものがあるときに、そういったものがその時々的重要な課題として位置付けられるというようなことは、例えば統計改革などでもあったのではない

かとおぼろげながら記憶しております。そういったような大きな科学技術行政の中における日本学術会議の在り方みたいなものが政策の課題として認知をされて、というような可能性は全くゼロでもないのかなと思って、一般論として申し上げたということでもありますので、これを直ちに来年度とか再来年度とかに持っていく覚悟があつてという話とは、ちょっと別のものとして御理解いただければと。

○ であれば、やはりここで今、具体的な在り方を論じている中で、全くその可能性を度外視したような、ただ概念的にはあり得るかもしれないというくらいの御意見をそういった蓋然性の付いた説明を伴わずにやられるというのは、それは逆に多くの先生方にとっても誤解を招くのではないかと私は考えました。

あわせて、むしろ先ほどお尋ねあつたように、やはりそういう中に入っていくためには、当然その解決策の時間軸といったようなものも、これは政府のいろんな取組の中の時間軸にやっぱり合わせていただく必要があるわけでございまして、骨太は別にしても、ただ、そういう方向での発言をされるということは、そういう解決の時間軸を政府が求めるような課題の解決のスピードに乗せていく、少なくともそういう方向で取り組んでいく用意はあると、そういうふうと考えてよろしいでしょうか。

○ 日本学術会議として政府の政策と全くかけ離れた時間軸で動いていくということはないと思っています。もちろんアカデミアとしての取組の時間軸といったようなものはあると思えますけれども、そういった政府の一組織が政府とかけ離れた形で対応していくということは、ないというふうには思っています。

○ 科学的助言にもあるので、発言してよろしいでしょうか。

政府の審議会を更にカバーするような、比較的短いタイムスケールでソリューションを出せと言われると、それに集中するという自体は、多様な意見を集めて議論していく我々にとっては、その役割の一部であるというふうに思います。一部であるというのはどういうことかという、いろんな審議をした後に、短い時間で解決しないものについては、まず、一定の見解を出していくと。ただし、例えば、エネルギーについても原子力のようにいろんな論点もありますし、色々な方面からの様々な論点を整理していくことも今考えています。

そういうふうなことを考えると、ある意見を集約するというよりも、論点を整理する部分、そのための時間スケールと、さらにそこから大きなもの（提言等）をまとめていくための時間スケールというように、ある程度時間スケールを変えながら進めていくという方法が必要ではないかというふうなことを、今、科学的助言等対応委員会の中でも議論をしていこうと考えて

います。それは、我々が3. 11とそれからCOVID-19が出たときの学術会議の内部での様々な議論を経験した結果、我々も今期、そのことに関して執行部も含めて真摯に議論をしているところです。覚悟があるのかと言われると、なかなか、すぐ覚悟があります、すぐやりますとは言えませんが、そういう考え方を持って今進めていくということは、幹事会の中でも議論しているところです。

○ なかなか御理解いただけないところがあって、学術会議の仕事というものの中に科学的助言が大事であるということは何度も申し上げているので、そこにもう争点はないと思っております。

問題は、例えば21世紀になってから、世界が科学的助言の在り方について非常に様々な議論をしていったという経緯がありますが、そこを踏まえた議論をしていただきたい。それは何であったかということですが、どうしても科学技術の提言に不確実性が伴い、失敗をしているわけです。BSEのときに典型的に失敗したわけです。それを踏まえて、アカデミアと政策当局者がどういう関係を取り戻すべきかという議論を各国がやってきた。そして、ほぼ同型の問題を我々は3. 11で経験した。その経緯を学術会議の中では検討して、そして当時の世界の科学的助言の在り方の議論を踏まえて、科学者の行動規範の改訂版を作っています。そこにはそういう論点を書き込まれています。しかし、余りそういうことを注目していただけなかったというところは、問題だろうと思います。それから、そのときの検討結果が今回のCOVIDに関して十分に活用できたかということに、反省の余地があるというふうに認識しております。とはいえ、その科学的助言が非常に重要な機能になっているということは、ここはCSTIと我々の間で争点はないんだと思っております。

問題は、具体の場面でのそれをやろうとしたときに、我々が絶対的にリソースが足りないということを、何度も申し上げているわけです。それは、全員非常勤であって、常にウォッチして、すぐさま動くという体制がないわけです。幹事会にしたって全員非常勤で、月1回の会合の設定を年間通じて確定しているだけであって、随時ぱっと人が集まって議論するというふうな体制にはないんです。

それで、即応性のあるものをできないということに対してじくじたる思いはありますが、そこをどうすればいいかということを実際に議論して考えていこうというのであれば、我々としては歓迎すべきなんです。でもなかなかそこに行かなくて、フラットだったら幹事会に権限移譲すればいいのではないかというふうなことを言われると、その程度のことはやっておりますと言わざるを得ない。だから、そこじゃないということです。

○ 度々申し訳ございません。

まず、覚悟みたいな話で、ちょっとやや感情的になったことは、これはお詫びを申し上げたいと思います。ただ、もともとその発端は、申し訳ないですが事務局の方から骨太ということを引き合いに出されて、もともとただでさえ政府の中でかなり厳しい折衝を経て閣議決定に持っていき、骨太の方針に持っていきことがいかに大変かという思いが、これまでの役人経験としてあるものですから、当然そこにはそれ相応の覚悟を持って、実務の生々しいプロセスに入っていたかなくてはいけないという思いがあったものですから、ついそういうことを申し上げたことは、お詫びを申し上げたいと思います。

ただ、その一方で、今、ございましたそのリソースの問題、結局そこが発端だと思っております。ただ、リソースが足りない、そうはいても、今の予算の制約の中では、なかなか骨太の登録みたいなことも含めて、現実的に難しい。となれば、以前御発言がありましたし、今ほかの先生方の御発言に出たように、それは今の組織形態を前提としているから行き詰まってしまうところの話であって、そこをもう少し組織形態を広げて考えれば、財政的な面の努力がもう少し自由にできる余地みたいなものもあるのではないかとといったような御発言、御提案も、これまでの議論の中ではあったかと思いますが、そういうところまで土俵を広げた上での財政の様々な可能性の追求というのはいかがなのかなということ、ちょっと今、自身、まだ、事務方の立場で恐縮ですが、私自身思っているということは、お伝えさせていただきました。

以上、失礼いたしました。

○ ありがとうございます。

手が挙がりましたね。どうぞ。

○ ありがとうございます。

今の議論をお聞きしております、これまで何度かお話ししていることと同じ内容ではあるのですが、改めて申し上げたいと思います。

おっしゃいましたように、科学的助言機能が重要だということはもう明らかでありまして、それをどのように伝えていくかというところで、なかなか十分に伝わらないという御発言も今あったわけです。何をどのように強化していけばいいのかというところを知るためにも、先ほど考察のプロセスという御発言も議員の中でありましたが、3か月かどうかは別として、ある一定の期間を区切って、今取り組んでいらっしゃる中長期的な課題について、学术界から社会に向けて、提言のような形で実際に伝えるべきメッセージを伝えていくというプロセスをトライアルとして行うのはいかがでしょうか。

先ほどの広報機能の体制という御議論もありましたが、どこを強化すればいいかを知るためにも、ある一定期間で活動をしていただいて、その中でこの効果がどうであったかある形でモニターをしていくという、ある種のワンパッケージをやってみるということが必要ではないかと思います。その中で、どこをどう強化すべきかが明らかになってくるということはあっていいのかなと、改めて申し上げたいと思います。

○ ありがとうございます。

どうぞ。

○ ありがとうございます。今日、ほかの議員の方がおっしゃっていることと余り変わらないのですが。先ほど梶田会長から、助言機能の見直しや改選プロセスの見直し等のお話がありました。このようなお話があるということは、ある意味でいうと、日本学術会議そのものがやはり今、自己改革をすべきタイミングにあるのだという御自覚があるのだと思うのです。そのような自覚があるのであれば、その改革というものに対して、自分たちの動きがどうなのかということを自己評価して、それを社会に向かって発信するというのは、これは言われてやることではなくて、至極当たり前のことではないかと思っております。

今回そういういろいろ変わっていくことに対する考え方は示されているので、一番大事なことは、その実行性をどう高めていくか、その実行性を高めていくために、自分たちはこういう努力をしているけれども、このような例えばあい路があったりとか、このような障害があるから進まないんだみたいなことも含めて、それを示していただかないと、まずいけないんじゃないかと思っています。

私はこの第1回の会合で、学術会議として自己評価をどうしているかということを知ったことがあるんですけども、たゆまぬ改善に向けた自己評価ということはやっぱりやり続けなきゃいけなくて、今回こういう学術会議として新たな見直しをやっていくということは、非常に良いタイミングなので、このタイミングでこそやっぱりもっと自己評価をして、さっき皆さんが3か月ごととおっしゃっているのは、今、自分たちが変わろうとしていることに対して、どういうふうに進んでいるかということをやっぱり言うべきじゃないかというふうに思っております。

そういう流れの中でいうと、先ほどスピード感を持って取り組むべき事項と時間を掛けて取り組むべき事項があると。これはおっしゃるとおりだと思っています。じゃ、スピード感に取り組むべき事項としては、どんなものが優先課題として考えられていて、それをどれぐらいの時間軸でやろうとしているのかということも、やっぱりある程度、本来であれば宣言して進め

るべきじゃないかと思っています。ですから、僕は今回のこういうふうな議論が起こっているというのは、ある意味でいうと、日本学術会議にとっても千載一遇のチャンスなんじゃないかというふうに思っていますので、このチャンスを生かして変わっていくということに対してトライして、我々CSTIとしてもそれに対して応援していくというような格好が望ましいんじゃないかなと思っています。

以上です。

○ ありがとうございます。

○ 大変、学術会議に対して親身なアドバイスを頂いていると思っています。

そこで一つ確認をさせていただきたいのは、何か紙をまとめるかどうかというのは第1回目のときにはそれもオープンだとおっしゃっていましたが、今日の論点案を見ますと、まとめるにおいがするので、多分これが原案の原案みたいになっているんだろうなと思います。

そのときにやはりお願いしたいのは、我々はこの場では学術会議として一貫して発言しておりますので、我々のオフィシャルな文書というのは4月のものに尽きております、現時点で。

したがって、今回おまとめになるものは飽くまでCSTIの立場からのものであって、学術会議が了としているというふうな読まれ方をしないような書き方にさせていただきたい。これは前にも申し上げたことであります。

今回、個人の立場としてという言い方でおっしゃったんですが、我々としては個人の立場ではなくCSTIの立場としての御意見を伺いたいと思っています。つまりCSTIと日本学術会議はどういう関係にあるのかということは第1回目の大臣の発言の中に明瞭にそのトーンが響いておりますので、その部分をきちんと書き込んでいただけると大変有り難く思います。

それを前提として3か月なんなりという議論を先ほどからあります。これは当然CSTIから学術会議への指示といった話ではないという理解でよろしゅうございますか。

それから、むしろお願いとかサジェストというそういうニュアンスでお聞きした方がいいのか。それとも内閣府なりCSTIが審議依頼という形で、文書で何か出していただくという、そういう形式を踏んでいただきますと、我々としては回答という形であげることも可能になりますが、提言はもちろん先ほどから既に御議論があったので、提言というのは無理だろうというのは御理解いただいて、等のところですね。

これが何なのかということで、3か月おきにCSTIのこの場で会長が報告するということがどういう観点で決まるのかというのがよく分からなくて、その辺り、もう少し精密にさせていただくと大変有り難いと思います。幹事会の方に持ち帰っているいろいろ議論しなくてはいけな

い論点も含まれているやに思いますので、もう少し具体的にどういことを3か月なりなんなりということやするのか。なぜ3か月なのか、これは私は論点に依存して3か月かどうかなんという議論も決まるだろうと思います。これは形式論です。

プラクティカルに申しまして、大学の関係者ならお分かりだと思いますが、これから1月、2月、3月がどういう時期かというのは御存じのとおり、とても何かをすることが困難な時期に入っていくということは現実問題としてはあるということ是指摘しておきたいと思います。

以上でございます。

○ 私の方からも一言申し上げますと、まず、C S T I と学術会議は車の両輪であるという認識、これは恐らくどの議員の方も同じように考えておられますので、ほぼコンセンサスだろうと思います。もちろん個人の意見には若干の誤差はあるかもしれませんが、原則は恐らく同じだと思います。

これまでも提言に関して言えば、例えば、科学技術基本法の際にも学術会議からの意見を頂く、あるいは創発的研究に関して学術会議の会員にここに来ていただいて御意見を頂くことがございました。その際には両者の対等な立場を大切にしてきました。我々は特定の問題に関して学術会議の意見を聞きたいのだとお願いし、ここで見解を披れきしていただくということをやってまいりました。

その意味では、こちらが指示を出して、何々について答えよというような形で学術会議にアプローチしたことは一度もございません。むしろ車の両輪のもう一方と認識している学術会議に対して我々の方は極めて真摯に対応してきております。

2点目はC S T I という場に求められていることはかなり緊急性の高い政策の提言であります。科学的助言に関して、今、おっしゃられたことは少し時代がずれていて、各国のアカデミーの提言はどれを見ても、かなりアジャイルな提言、しかも政策に結び付くような提言を求められているという現実がありますね。

かつてのB S E のときよりももっと、3. 1 1 のときよりももっと、科学の問題に関わることに於いてアカデミアとして見解を付す以上に、より具体的な政策形成についてアカデミアとしての提言が求められているというのは、これはグローバルな形でほとんどそうです。

例えば、アメリカのアカデミアでは、ナショナル・リサーチ・カウンシルが膨大な労力を使ってやっている。そのような組織が日本の学術会議に付随していないというのはそのとおりです。人員やリソースが足りないということもそのとおりです。そこはたちごっこになってしまって、リソースが足りないならできないという状況は、恐らくどのアカデミーも同じ問題に

ぶち当たると思います。

政府内内局経費としての交付金だけではもうやっていけないということは明らかであって、したがって、財務的にも多様なところでそれをカバーしていかなければいけない。それゆえに、各国のアカデミーもスピーディーな政策提言を求められるような活動の部分については、アジャイルなグラントを取ってくるということもやっておられますし、民間からの寄附を募るということも必死になってやっておられる。それが今の各国のアカデミーに求められている政策提言や助言の現状だからです。

この点は組織の問題につながりかねないので、ここで深くは申し上げませんが、現実問題として、グローバルなスタンダードで言うともうそういうことが起こっているということだけはお互いに認識しておく必要があると思います。

このことについて、何人かの議員の先生から出た提案として、政策上重要なテーマに関しては、仮に3か月程度、別に6か月でも構わないですが、期限を区切ってお互いのコミュニケーションはできないでしょうかサジェスションをしているに過ぎないと思っています。ですから、C S T Iからの指示などという意識は毛頭ありません。

したがって、そのような時間を区切ったようなお願いに関してお答えすることができません、ということなら、それはそれで結構だと思います。今、申し上げたような状況を鑑みて、政策を担わなければいけないC S T Iと学術会議との関係において、一つの提案を出させていただきました。3か月なりなんりの期間を定めて、ある特定の大きな問題についてお考えになったらどうでしょうかということ提案するけれども、もし学術的な検討をするので、3か月や6か月では無理だという御回答があるのなら、我々としてはそういう判断をされたのだと受け止める。学術会議との関係の中で私たちはある提案をしたけれども、それは受け入れられなかった、それがお互いの立場の違いなのだと、もし報告書を作るのであれば書くことはできると思います。

○ 政策との結び付きが強まった科学的助言が重視されているトレンドであるということについてはおっしゃるとおりだと思います。

ただ比較の際に、ナショナル・リサーチ・カウンシル、日本学術会議と比較するというのは不当な比較だと思います。そして、予算規模も歴史も全然違います。それを現在の日本学術会議と比較して、NRCがやっているんだからできるだろうという話はないだろうと思いますね。

○ それは全然違うと思います。

○ どうして。

- ナショナル・リサーチ・カウンシルに入っている最大のグラントはデパートメント オブ トランスポーターション。それに他の省庁からもグラントが出ています。これは、特定の問題に関して、アメリカ連邦政府が是非とも答えをアカデミーから出してほしいという形で出しているお金です。
- いや、それは分かっています。そこを言っているわけじゃない。
- アメリカのアカデミーになれなどかけらも思っていないし、ナショナル・リサーチ・カウンシルを学術会議が持つべきだとも思っていない。ただ、内局経費だけに依存している構造の中で、おっしゃっているようなリソースを今後作っていくことができるのでしょうかと問うているのです。もし仮にグラントをとって政策提言を作ろうとすれば、その部分の特定のテーマに関してはアジャイルな対応を確実に求められる。それはC S T Iみたいなところで、日々感じることです。それがアカデミアとして正確性と公正性を完全に担保するものであるのか、それは歴史が検証することでしょうけれども、グラントをもし取れば確実に求められると思います。
- 日本にグラントの仕組みはないんですけど。
- グラントの仕組みを作って欲しいと学術会議から提言されればいいじゃないですか。
- いやいやいや、その議論を今ここでするんですか。
- それは一つの方向性としてあるでしょう。
- それは結局法律で、各省庁に対してそういう場面では学術会議に対して、諮問するという、そういうことを、法律作って……。アメリカなんかそういう法律ありますよね。
- もしグラントを取れば、内部の組織構造の中で、確実に様々な議論をせざるを得なくなる。
- そういう制度設計の議論がどこがするかというと、それはC S T I がなされればいいと思いますけれどもね。
- それは我々というよりはむしろ学術会議側からの提案として出されればいいじゃないですか。組織形態の問題にも若干触れていくことになると思いますけれど。それは我々の学術会議に対する評価ではなくて、学術会議の自己評価の中でその提案を出されればいいと思いますよ。
- それは相当抜本的に全てやり直すリフォームになりますね。
- 何度も申し上げますけど、C S T I と学術会議は車の両輪であって、一方は基軸をアカデミアの中心、学協会の御意見に置いている。一方でC S T I は政策に関することを担わないといけないというポジションにいる。しかし、この二つ両輪が離れてしまうということは極めて危険だと恐らくここにおられる全員の方が思っておられます。

○ 前からお話しになっているような特定の問題が与えられたとき、当然リソースが必要になる、その資金をどうするかと考えると、それは自然にグラントの形で引き受けることとなります。グラントというのはその資金を受けて活動した限りにおいてその評価も含めて様々な、スピードを持った結果の提出が求められます。

そのような助言や政策提言を学術会議がお引き受けになられるのであれば、是非それを組織的にやっていただきたいと思います。これは私の個人的な意見にすぎませんが、そう思います。

○ それは現状においてはほとんど不可能だと思いますね。理屈は理解しますよ。各省庁がそういうふうな形で振る舞うような法律ができて、そして学術会議の中に一定の常勤のリサーチャーが存在していて、そしてクイックなレスポンスとそれが必要な研究者を組織するという、そういうディレクション機能を持つという、そういうことですよね。

それは私も理想としてはそのとおりだと思いますが、どれ一つ満たしていない現状において、我々が3月の段階で議論していたのは、その前提が全然違いますので、しかもそれはなぜそういう前提が違っていたかというのはあの当時の状況をお考えになれば明らかであって、今、全然フレームが違っているので、その議論をこの最後の段階でやろうというのであれば、お任せするしかないのかなと、どうするんですかね。

○ これはC S T Iのmatterではないですよ、その問題は。C S T Iは学術会議がこうあるべきだという立場でもないし、何度も申し上げるように、車の両輪のイコールな関係ですから。

そもそも、学術会議の在り方に関して議論しろという大臣からの諮問には、かなり広いイシューを含んでいるわけですね。したがって、今のようなことは議論としてはあり得ると思います。しかしそれを今の学術会議では受け止められなというお答えであれば、それはそれで結構かと思います。そういう回答であったということは、仮に報告書を作るのであれば、書くことはできると思います。

○ イギリスのロイヤルソサエティ……。

○ それは報告書の中に書くかもしれませんが。しかし、書かれるかもしれない報告書には、学術会議がそうすべきだということを書くわけではなくて、我々が考えている在り方に関する意見表明ということはあると思います。

○ 我々はやはり今、学術会議の方はボランティアベースで、別に本業を持っているわけです。今のアジャイルな話をすると、学術会議の業務に集中することが必要になります。

そうすると、例えば大学から転籍をして学術会議の会員になって仕事をするというのであれ

ば、これはある程度の組織形態、強い指揮命令が可能な形態で仕事をしてもらうことが可能になりますけれども、一方で、今の会員は、一応自分の学術の領域はある程度仕上がった、それで会員に選ばれてこれからは国の将来のためにいろいろな意見を言うのだという志で来ているので、そうした人をベースに仕事をしているということを考えると、（ご指摘は）今の会員の在り方の、組織の在り方も変えていけということと同じように思えますが、そういった理解でよろしいでしょうか。

○ 別に組織をどうしろなんて言う立場でもないですし、CSTIもそうだと思います。これは学術会議が組織としてどう考えるかということであって、何もそこに方向性を押し付けるわけでも何でもありません。

学術会議の中にそういうグラントを引き受けるセクションがあって、フルタイムで活動する人が必要なかどうか、それは私は分かりません。そこは学術会議という組織が御自分でお考えになることだと思います。我々外部の者が組織のその内部の構成に関してまで意見を差し挟むべきではないし、そういうポジションでもないと思います。

どうぞ。

○ 今の御発言にちょっと戸惑ったんですけれども、確におっしゃるとおり、学術会議の会員の方というのは皆さんそれぞれ大学とか企業において本業を持っていらっしゃる中でボランティアに活動なさっているというのはよく分かるんですけれども、その学術会議の会員を引き受けるというふうになったときに、それなりの覚悟があって、自分のほかの時間を削ってでも貢献しようという思いがなければいけないはずなんですよね。

今、おっしゃったことを全く否定するものじゃありませんけども、今、おっしゃったことだけを前面に出されて、だからできることしかやらないんだ、みたいなふうに聞こえてしまうのは、そんな意見がもし世の中に出ていくと、世の中も非常にかかりすぎるんじゃないかなというように、聞いていて非常に戸惑いました。

○ 議論の前提がここでかなり変わってしまっているんで、我々は4月に……。

○ 議論の前提は何も変わっていませんよ。

○ いや、変わっていますよ。

○ 何も変わってません。

○ 変わっています。

○ 我々に与えられたのは極めてラフな、学術会議の在り方に関して、学術会議と真摯な討議をしてください。これだけなんですよ。

- でも、4月の我々の報告書の説明から入っているし、それについての質問ばかりだったですよね。
- 全然変わってないですよ、前提は。
- いやいや、我々は4月の報告書、前提です。
- 4月の報告書から派生した議論がここで展開されて、それに関して、どのような意見の相違が生まれたか。それはそれで構わないと思います。
- 今日初めてですよ、この論点が明確に出てきたのはね。
- そんなことはないと思いますよ。私は個人的にも財務の構造の問題は何度も、第一回目の会議からお話ししていると思います。各国のアカデミアの財務構造のデータもお出しして、そこから出てきているなら明確にグラントの問題だということも申し上げていると思います。
- でもその後、議論、グラントの問題、全然深まってないんですけど。
- それはみなさんが受け止めないから。
- いやいや、そうじゃない。
- 私たちが出している論点をきちんと真摯に受け止めようとしなから論点になってないだけであって。
- いや、そんなことはないです。
- 最初から出しています、この問題。
- 我々が考えているのはこの3年間の間でできる改革のフレームの中で議論しているわけですから、そのグラントの話なんて、完全にそのフレーム超えていますから。
- ほかの先生方、いかがでしょうか。
- 以前グラントについても考えられないかという話を伺ったこともありますが、今回の「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」は、やはり現状の今ある中で全てを分析して、それで設置形態も含めてゼロベースで考えた結果として出させていただいているので、色々と、今できる可能性について問われていることに関しては、部分的に受け入れてやれるところはありますけれども、アメリカのようになれば、第一歩を踏み出せと言われても、やり方を含め、今の状況ではなかなか議論を進めるのは難しいと感じている次第です。
- 時間軸が全然合っていないということがよく分かりました。我々はこの任期の間の中でできることというフレームの中で議論している。しかし、10年ぐらい掛かるようなスパンの話がされていて、そうしてそこへ第一歩を踏み出すということを考えるべきだと、こういうスタイルの議論。

○ いや、少し違うと思います。ここの会議体はいろいろな専門を持っている方たちが集まっているところで、それぞれの方がアカデミーに関する自分たちのあるべき姿論を述べる、それについて学術会議側からそれについてレスポンスをもらう。どことどこが合うか合わないかという議論をまとめる。それを記録として残すというだけであって、それ以上でもそれ以下でもないです。

○ いやいや、そんなことはない。今、グラントの話とかという話になると、それはもう日本の省庁の振る舞い方全てに関わってくるような話になる。そして、人材もそういう形で研究者人材が流動的に動くような社会に変わらないといけない。それが3年やそこらでできるわけがない。我々はだからその3年の範囲の中で考えている。

しかし、10年のスパンでそういう方向を模索すべきではないかという提案に対しては、私は個人的には受け入れてもいいと思います。しかしそれを現在の学術会議の在り方の議論のところの中に入れ込むということに対しては賛成できない。

○ いや、だから何度も申し上げているように、現在すぐに、ここ1年ぐらいで変わろうなんていう話はどこも出ていません。何も出てないと思います。

○ ここでは出てない。

○ 我々がここで議論しているのはここでの議論ですから、何も出てません。

○ 我々の報告書はこの3年間の間でやるというフレームの中で書いているということだけは確認していただきたい。

○ いいでしょうか。

今の話をずっと伺っていて、私の認識が正しいかどうか教えていただきたいんですけども、大きく括ると、今あるリソース、今ある形態の中でできる科学的助言というものをより深度ある形でやるという方向で改革をしているということであって、本来的にやるべき姿、新しい世界の流れの中であるべき学術会議としての科学的助言の在り方については、理想論としては分かっているけれども、この中では議論しない、そういうふう聞こえて仕方ありません。それは果たして国民が学術会議に求める姿なのでしょう。

今あるAs Isのリソースとお金でできるところまでやりますけど、以上終わり、そこまでだと。そういう議論で我々国民の学術会議に対する期待というものが満足できるというふうにお考えになっていらっしゃるということによろしいでしょうか。

○ 今の議論を聞いていて、御質問とも関係あるのですが、学術会議側の正直な懸念を申し上げますと、いろいろなところで、国から離れて自分たちのお金でやっていけというような議論

があって、實際上、そんなことになったならば、恐らく、例えば特に国際的な活動などは多分お金がなくてすぐにできなくなり、そのことは学術会議だけの問題ではなく日本の学術全体が世界から孤立するような状況になるということで、非常に大きい懸念を持っているわけです。

ということで、余り口には出せないのですが、天地がひっくり返るようなことになってしまったならば、日本の学術界が大変なことになるという懸念を持ちながら常に我々は議論をしています。ということで、やはりどうしてもある意味コンサーバティブに見える部分が出てきてしまうと思っております。

その上で、先ほども言ったように、グラントという言葉が正しいのかどうか分からないのですが、将来的にこのような状況の中で、どのようにしてその役割を発揮するための経費も受けるかと考えたときに、やはり審議依頼があったときには、例えばお金を一緒に頂いてというのは重要なオプションではあると私は思っています。

そのように、天地がひっくり返るようなことは絶対やってはいけないという思いが我々に非常に強くあるということを一応御承知いただければと思います。よろしく願いいたします。

○ 先ほどからの話を伺っていると、やはり自分たちの任期中にできることしかやらないということになってしまうと、次の世代もやはり自分たちの任期中にできることしかやらないというようなことがずっと続いて行って、いつまでたっても皆さんが考えていらっしゃる理想論にはたどり着けないですね。

長期的なロードマップを描いて、その中で自分たちの任期中にはここまでを片付けるなどと決めることが大切だと思うのです。長期的なロードマップなしに自分たちの任期中だけに焦点を当てるとできることしかやらないと、非常にがっかりする答えに聞こえてしまうんですけど。

○ どうぞ。

○ 申し訳ございません、正直なところ、多少売り言葉に買い言葉になってしまっているような議論がありましたので一言。もちろん我々の任期の間しか、私たちが實際上改革できる期間というのはないので、その間にやるのですが、そうは言いながらも、先ほどの国際対応等での説明のとおり、期ごとに方針を変えていったのでは我々の学術会議が国際的にやっていけないというようなことは明確に認識しておりまして、次の期のことまで、どこまで言うのかということとは常に気を遣いながらも、長期的に見てより良い方向に向けていくということは、もちろん我々としては常にきちんと考えているということでもあります。

○ あともう一つ付け加えますと、科学的助言というのが大事であるというのは、私は前からそう思っていますけれども、それは私の専門分野の関係性上、そういう言葉に馴染んでいるか

らです。多くの研究者は科学的助言という言葉自体に馴染みがないというのが現実の日本です。

なぜかと言うと審議会があるからです。各種の審議会の方で政策には関係するというふうに考えていますので、学術会議というのはボトムアップで自分たちの研究分野を中心とした日本の科学技術振興が中心だという発想がどうしても強いと思います。

それを変えなくてはいけないという議論に対しては賛成しますけれども、現実はやや科学の助言という言葉を表に出して、そしてそれを強化するということまで来たというステージです。だから、私は時間軸というのを申し上げているので、3年間でできることしかやらないなんて言っているのではなくて、まず3年間で、それができただけでも日本のアカデミアにとっては大変大きなことだろうというぐらいの時間軸で考えています。ということをお願いしたいという意味です。

○ 私の発言は3年ぼっきりでやめるというふうにご理解いただいたとすると、それは本意と大きく違いますので、是非訂正させていただきたいと思います。これまで提言といってもいろいろなグレードのものがございましたが、今回、我々提言を非常に重いものとして受け止めております。

今まで提言を出すに当たって意見が分かれて、結局上手くまとめられなかったような話もいくらかでも経験しているわけです。その中でも特に意見が分かれるものをどういうふうに併記していくかというすべもなかなかなく、それで問題として残されていくのがいっぱいありましたので、そういう経験も踏まえて、カテゴリーを変え、プロセスを変え、両論併記ができるようなものとして「見解」という新しいカテゴリーを作り、それを継続してやっていくことによって、本来の提言のグレードアップもできるという考えを皆さん会員の中に共有しておりますので、その方向での改革がずっと続いていくと考えています。

○ いかがでしょうか、ほかの議員の方たちからコメントなり御意見がありましたら、いいですか。

○ 繰り返しですが、私たちは学術会議に対して、我々の立場から学術会議はこうあってほしいということを、皆で共有できたことを、報告書の取りまとめを必ずしも前提としていませんが、紙の形で出ささせていただく可能性があります。

今日は飽くまでも個人的な立場で意見交換をさせていただいていますので、そのことは明確に理解していただきたいと思います。今日はかなり激しい議論がありましたけど、私たちCS T Iの中ではいつもこれぐらい激しい議論をやっています。学術会議の方々は驚かれたかもしれませんがこれは中での議論で、そういう過程を経ながら統一見解を外に出していきます。外

に出していくときにはきちんと合意して、かつその立場としては私たちと学術会議の関係性については先ほど私が述べた、あるいは先生が何度も述べていますけれども、そういう位置付けだということを御理解していただいて、是非建設的な議論を今後続けていきたいというふうに思います。

以上です。

○ ありがとうございます。ほかの方々はよろしいでしょうか。

今、ご意見があったように、それぞれの方、それぞれの立場でいろいろな御意見があつて、ただ取りまとめる場合には、どこかでコンセンサスを取れたものを是非書きたいなと思っております。それはあくまでC S T Iからの希望というか、見ている希望のようなものに過ぎません。それは書く必要があるなと思っております。これが答えの一つです。

というふうに思つて、正直言つてなかなかしんどいなと思つておるところでございます。

それでは、随分長く時間を取つてしまひまして申し訳ございませんが、とても有意義な議論ができたと思つたので、御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

では、これで学術会議の議題は終わります。

議事概要に関しては、非公開部分に関する日本学術会議の菱田副会長、望月副会長、高村副会長及び小林第一部幹事並びにC S T I議員の皆様の御発言部分については、それぞれ御確認を頂いた上で発言者を伏した形で約1か月後に公表させていただきます。

それでは、菱田副会長、望月副会長、高村副会長及び小林第一部幹事、どうもありがとうございました。

本日は有識者の方々からいろいろな御意見を頂き活発な議論ができたと思つたと思います。これまでの議論を通して、政策討議と学術会議との間で更に認識の共有が進み、ある程度この政策としての方向性が私は見えてきたように思つた。

次回、また時間を取つて議論をしていきたいと思つております。

日程や詳細につきましては、追つて事務局からお知らせさせていただくことといたします。

本当にどうもありがとうございました。

午後11時52分 閉会